

研究者の夢を紡ぐ —大阪大学出版会の存在意義—



夢はバラ色

岩谷美也子*

To weave researchers' dreams by publishing
—Mission of Osaka University Press—

Key Words : University Press, Academic books, Textbooks, Cultural books,
Publishing support

◆はじめに

大阪大学出版会は、このたび、特色ある出版活動を展開する出版社として「出版学会新聞社学芸文化賞特別賞」を受賞した。去る1月16日に日本出版クラブで行われた受賞式において、次のような選考のことばをいただいた。

今年は新聞社学芸文化賞の特別賞として、大阪大学出版会の『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』を選んだ。書名に掲げた課題に、阪大の教員たちが数学、歴史学、精神医学などの専門領域からアプローチし、学問とはどういうものかを楽しくかつ知的に示してくれる。筆者の一人は本文中で自らを「偏屈かつ屁理屈好き」と称した。そんな大学教員たちの姿が面白い。分かりやすさや単純な善悪の区別が幅を効かせる現代に、考え抜くことの大切さを認識させる。他の大学出版会でも同様の企画はあり得ると思う。だが、先駆けて学生たちと刊行した姿勢を評価したい。(共同通信社 杉本新編集局文化部部長)

この『ドーナツを穴だけ残して食べる方法 越境する学問—穴からのぞく大学講義』の出版は、大阪大学の教員、学生、出版会の三者が協働して、総合大学である大阪大学の多彩な研究を世の中に魅力的に伝え、かつ学生への教育にも資することを目指した「ショセキプロジェクト」の成果である。



* Miyako IWATANI

1961年4月生
大阪大学法学部法学科(1985年)
現在、大阪大学出版会 編集長
一般財団法人大阪大学後援会 事務局長
TEL: 06-6877-5405
FAX: 06-6877-1617
E-mail: iwatani@osaka-up.or.jp

2013年に創立20周年を迎え、「大学出版会」、とりわけ「大阪大学」の出版会としての存在意義を模索し続けた大阪大学出版会のチャレンジでもあった。それがこのように評価されたことはたいへん喜ばしく、この出版自体をご支援くださった方々はもとより、これまでの紆余曲折の歳月を支えてくださった多くの先生方、読者、そして関係者の皆様に心から感謝の意を表したい。



◆大阪大学出版会の成り立ち

大阪大学出版会は、吹田キャンパスのウエストフロントに位置する、一般財団法人として独立した職員7人の組織である。

大阪大学創立60周年記念事業の一環として、大学に出版会をもちたいという熊谷信昭総長(当時)の強い希望に対して、アサヒビール株式会社の樋口廣太郎会長(当時)が理解を示され多額のご寄付をくださったことにより、1993年に設立された(初代会長: 脇田修名誉教授)。



大阪大学出版会のマークは「真理」を象徴する。女神が右手にもつ太陽(真理)の光は、ペンと本を介して地球の人びとにあまねく及ぶ。OSUPはOsaka University Pressの略称。イタリアの美術史家チェザーレ・リーパが著した『イコノロギア』(1593年)をもとに、UPの使命をイメージし、辻村紀子がデザイン化した。

それから22年、大阪大学の「研究」「教育」「社会貢献」という機能に応じ、学内外の研究成果を「学術書」「教科書」「教養書」として出版し、広く公表・普及することによって、学術の振興と文化の向上に寄与することを目的として活動している。

出版事業は、一般財団法人大阪大学後援会（理事長・大阪大学出版会会長：三成賢次教授）の評議員会・理事会の了承のもとに運営され、出版企画は、出版会の企画会議を経たのち、大阪大学の教授により構成される出版委員会（委員長：金水敏教授）の厳正な審査を経て決定している。

◆確かな知識を伝える学術書

世界有数の研究型総合大学を志向する大阪大学が擁する多様な研究者やプロジェクトチームによる優れた研究成果を出版することは、学術出版社としての重要な使命である。

大型プロジェクトの成果である『超精密加工と表面科学』、『コンフリクトの人文学 I-V』などは、単なる報告書に留めず出版することにより、国際的に卓越した研究拠点として、国際競争力のある大学づくりを進める大阪大学の取り組みを周知し、より多くの研究者の参考に供することに貢献している。

また、科学研究費補助金研究成果公開促進費「学術図書」による出版も、申請段階から支援しており、毎年多岐にわたる論文が、獨創性・先駆性・国際性を兼ね備えた学術的価値の高いものとして採択されている。

学術リポジトリやオープンアクセスジャーナルの拡がりなどにより、学術コミュニケーションのあり方が再構築されつつある昨今においても、とくに社会科学や人文科学分野、あるいは分野横断的な学問領域では、紙媒体による出版は依然として重要な意義を有している。とくに若手研究者にとっては、著作の公刊がキャリア形成に影響を及ぼすことさえある。一方で、科研費の縮減をはじめ、研究者をとりまく出版環境は悪化の一途をたどっている。これらの状況にかんがみ、大阪大学出版会は従来の学術書出版に加え、「大阪大学教員出版支援制度」を創設し、年間10点（うち若手研究者に対する5点については大阪大学未来基金の支援を得ている）の出版企画を採択している。この制度により刊行した『大学アーカイブズの世界』は、『文書館用語集』、『アーカ

イブ事典』など全国に先駆けてアーカイブの重要性を唱え、体系化し指針を示してきた大阪大学出版会ならではの学術書である。

また、部局との連携にも積極的に取り組んでいる。大阪大学総合学術博物館に保管される資料の公開や研究成果公表のため、「大阪大学総合学術博物館叢書」を刊行しており、2006年の創刊以来、マチカネワニ、映画「大大阪観光」、森野旧薬園、近代大阪の経済、上方の酒醸造、戦後大阪のアバンギャルド芸術、野中古墳など特色のある多様なテーマを扱っている。



大阪大学総合学術博物館叢書

さらに、『ステロイド性骨粗鬆症の管理と治療ガイドライン』、『プラズマ原子分子過程ハンドブック』などの刊行により学会にも寄与している。学会からも、『近代日本の地図作成とアジア太平洋地域』に日本地理学会賞、『古墳時代の埋葬原理と親族構造』に女性史学会賞、『新しい公共と市民社会の定量分析』に日本NPO学会林雄二郎賞、『オランダ植民地体制化ジャワにおける宗教活動』に東南アジア史学会賞が授与されるなど高い評価を得ている。



学術書 (2014年刊行)

◆学びを支え人材を育てる教科書

学生に基礎知識を教授するだけでなく、主体的に学ぶ意欲と発展的な専門的知に誘うことをコンセプトとする教科書を刊行している。大阪大学出版会が創立10年を迎えようとしていた頃、当時の松岡博会長と城野政弘大阪大学副学長（教育担当）のご指導のもと、脆弱であった大阪大学出版会の財政基盤を立て直すとともに、大阪大学らしいテキスト出版に挑戦するために、教科書シリーズ「大阪大学新世紀レクチャー」を創刊した。

その第1巻として2003年に刊行した『日本国憲法を考える（2014年第3版）』は、身近な問題がいかに憲法と関連しているかを知ることによって、憲法をめぐる論争の本質的理解にも役立つもので、今なお、そして今だからこそ多くの大学で入門書として採用されるロングセラーとなっている。一方、『市民のための世界史』は、阪大史学の挑戦として、暗記中心の高校歴史教育刷新の取り組みから生まれた、歴史全体を鳥瞰する大学レベルの教科書として、これからの歴史教育を変えうるインパクトのある一冊である。また、今春、工学部の全学生を対象とした教科書『工学系の数学解析』を刊行し、実際の授業と学生の便宜を考慮し、全担当教員が同じテキストで教えることが実現した。

大阪大学と大阪外国語大学との統合は、大阪大学出版会に重要な転機をもたらした。高度な言語教育の伝統は、包括的な内容をもつ「世界の言語シリーズ」（現在までに20言語中10言語刊行）として再現されている。単なる語学力の習得にとどまらず、異文化理解能力、異文化コミュニケーション能力を備えた真のグローバル人材を育成するという気迫に満ちたこのシリーズは、多くの学外学習者にも活用されている。



教科書
(2014年刊行)

また、文理の枠組みを超え俯瞰力と独創力を備えたグローバルに活躍するリーダーへと導くための人材養成教育を行う大阪大学未来戦略機構の超域イノベーション博士課程プログラムのなかで開発された本として『理系の言葉—微小量の魅力』がある。新しい教育実践の指針ともなりうるものである。

近年では、電子書籍やオンデマンド印刷により、博士課程レベルの教育にも対応している。今後さらに多分野、多面的教材開発に協力していきたいと考えている。



◆大学と社会をつなぎ知的探究心に応える教養書

大阪大学は懐徳堂、適塾を精神的な源流とし、自由闊達で進取の気性に富んだ大阪の学問風土を受け継ぎ、時代に先駆けた発想によって学問・教育の発展に貢献してきた。また、大阪が物流や情報の交流拠点であった江戸時代に、豪商が学問を支えたように、大阪大学の前身である大阪帝国大学も大阪の政財界や市民による熱心な誘致運動の末、寄付をもとに、また大阪外国語学校も大阪の実業家の寄付をもとに創設された。大阪大学出版会も先述したように大阪が創業の地である企業からの寄付により生まれた。この歴史が物語るように、大阪大学は当初から産業界や市民にとっても近く、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとして、社会に責任を負い、市民や学生の知的好奇心や探究心に答え、大学の知を伝える活動を重ねてきており、現在も各種アウトリーチ活動を展開している。

それは出版にも反映され、懐徳堂、適塾をはじめとした多くの教養書を出版してきた。大阪大学創立70周年には記念出版事業として、話題性豊かな最先端の研究を、学生や一般読者、異なる分野の研究者を対象として解説するシリーズ「大阪大学新世紀

セミナー」全30巻を全学の協力のもとに刊行した。

この精神は、教養書シリーズ「阪大リーブル」に受け継がれている。創刊にあたり鷺田清一会長（当時）が次のようなことばを寄せてくださっている。「フランス語の「本」(livre)と「自由」(libre)を重ねたところ、そこに「阪大リーブル」の精神は込められています。そこからv/bを外すと「読む」(lire)ということばになります。読書は、未知の他者との対話です。(中略)読んでいるうち、わたしたちの思考と感受性は、ときに微かに、ときに劇的に変化します。生きるうえでのこれまでのこだわりがほぐされ、もっと広々とした場所に出て世界を見ることができるようになります。そう、「本は人を自由にする」のです。本づくりに携わる者として肝に銘じたい。このシリーズは『ピアノはいつピアノになったか?』を第1巻として、現在までに50巻を数えるに至っている。『実況・料理生物学』は、大人気講義を書籍として再現したもので、料理を題材に生物学を理解できる本として反響を呼んだ。懐徳堂記念会創立100周年記念出版である「懐徳堂シリーズ」では、懐徳堂の学問の内容や貴重資料のすべてが5巻にまとめられた。文系、理系、複合領域を問わず、意欲的な企画がつづいている。



阪大リーブル

阪大リーブル以外の教養書として、大阪大学で始まった学問領域である「臨床哲学」シリーズを刊行中である。また、新しい取り組みとして、数学教科書のコミック版『証明の探究 高校編!』、児童書『モンゴルのことばとなぜなぜ話』を刊行し、若い世代への発信も行っている。



新刊『アリスのことば学』は、『不思議の国のアリス』の言語学的研究の集大成であると同時に、英語学習者のための教科書、一般読者のための教養書としての性格を兼ね備えた一冊である。

◆おわりに

司馬遼太郎は『洪庵のたいまつ』のなかで、洪庵は恩師たちから引き継いだたいまつを、より一層大きくし、弟子たちの一人ひとりに移し続け、その弟子たちのたいまつが、後にそれぞれの分野であかあかと輝き、やがてはその火の群が、日本の近代を照らす大きな明かりになったという。

大阪大学出版会の夢は、世界が地球規模の深刻な重要課題に直面し混迷を極めるこの時代に、自然と人間の真理を探究し、人類社会の持続的発展と幸福に寄与すべく日々挑戦し、独創的で多様な知の資産を、現代そして未来を照らすたいまつとして伝えようと邁進する研究者の夢を本として紡ぐことである。

私たちは、学術コミュニケーションの変容に的確に対応しつつ、世の中のニーズを機敏にとらえ、大学出版会として確かな知識を伝えることはもとより、学問の面白さ、知の世界の奥深さを未知の読者、未来の市民に伝えるため挑戦しつづける力量とパッションを備えた出版会でありたいと思う。

